

「学校って何だろう？」の一つの答え

「雑学BN」の「TV番組等紹介欄」で案内していたので、4週連続の「夏ドキュ！ページセー・1461日の記憶」をご覧になった方もいると思う。

ある女性ディレクターが放送する当てなどなく、ある定時制高校の入学から卒業までの一つのクラスの4年間を一人でひたすら撮り続けたドキュメンター番組であった。

クラス38名の殆どは中学校で不登校の体験があり、また、それぞれ何らかの家庭的な事情を抱えており、また、非行歴のある生徒も……。

「生徒が主人公」と考える学校の教師は、「まずは彼らの居場所を作ること。」と、時にはぶつかり合いながらも生徒にひたすら向き合っている姿。

また、在校中に警察沙汰起こす級友、また、妊娠した級友、親の虐待で傷つく級友、等々に、時に言い争いながらも、いたわり合い、励まし合い、進級のための補習に付き合い、支え合う生徒たちの姿。

学校の統廃合問題に、「この学校には俺の居場所があり、立ち直りの機会を与えてくれた。この学校をなぜ廃校するのか！」と、街中で廃校反対のビラ配りをし、教育委員会に涙しながら訴える卒業生たち。

取材は1年半前に終わっており、番組の最後には、卒後、大学や夜間大学で学ぶ元生徒、子育てに励む元生徒、等々の現在の一生懸命生きてる様々な姿のシーンも……。

一方、先に読後感を記事にした「『いじめ』が終わるとき」の本の中で、いじめられ自殺する子どもたちに触れた次のような論考があった。

「この年齢の子どもたちは学校生活への関心が良くも悪くも人生の殆ど全てを占めている。子どもたちに学校以外の世界は十分に開けていない。

だから学校での居場所を奪われることは即、世界における自分の現在と未来における居場所を奪われるのと同じ打撃を受けたことを意味する。

学校での自分の居場所の喪失は、そのまま世界における自分の居場所の喪失として受け止められてしまうのだ。

自殺は自分に開かれている唯一の世界への通路と映ってくる。」

傷ついた心を「学校」で勇気づけられる姿、一方では「学校」に傷つき命さえ落とす姿……。

番組のナレーションに「『学校って何だろう？』の一つの答えがここにあります」とあったが、高校時代に良き恩師や多くの友に出会えて「居場所」があったお陰で今の自分があると思える身だけに、確かにこの学校には答えがあると思えた。